

組織目標評価報告書（平成23年度）

部局名：自然生命科学研究支援センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域	自己評価
①-1 目標	(光・放射線情報解析部門) 新規教育訓練講習会 14回 再教育訓練講習会 5回 英語による新規教育訓練講習会 2回
各部門 利用者研修会(2～7回) 教育訓練講習会(1～8回)法令によるものを含む (ゲノム・プロテオーム解析部門) 英語による新規教育訓練(1回)、理系学生のための教養講義(1回) (分析計測・極低温部門) 機器見学(講義等での)の受入れ(1-2回) (動物資源部門) 医学部医学科生物学実習(集中)の実施	(動物資源部門) 利用研修会(7回開催) 教育訓練(5回開催) 医学部生物学実習実施
①-2 目標とする(重要視する)客観的指標	(ゲノム・プロテオーム解析部門) RI利用者新規講習会を1回、再教育訓練を3回行った。また、薬学部専門講義(放射線化学概論)及び、教養講義を行った。 (分析計測・極低温部門) 《分析計測分野》 利用者研修会:6回(NMRユーザーズセミナー(5/9, 10/7), 水平型粉末X線回折装置(11/30), 予約課金システム(12/8), 生体高分子X線回折装置(1/17-18)) 分析計測分野講演会(6/24) 機器見学: 2回(蛋白質分子解析学(9/9), 理学部化学科(7/15)) 《極低温分野》 安全講習会: 1回(5/25)
②研究領域	自己評価
②-1 目標	(光・放射線情報解析部門) 研究成果論文の公表 4編 学会発表 5回 外部研究資金獲得のための応募 3件 科学研究費獲得(継続) 2件 学内共同研究の構築 異分野コア若手研究 1件 特許の取得 1件(特許第4923252号)
各部門 研究成果論文の公表(1編以上/各部門) 学会発表 (1回以上/教員/各部門) 外部研究資金獲得のための応募(1件以上/各部門) 学内外の共同研究の構築	(動物資源部門) 研究成果論文の公表(縦木:3編) 学会発表(縦木:1回) 外部研究資金獲得等(縦木:科研継続課題あり、干場:科研応募1件) 学内外の共同研究の構築(縦木:3研究グループと構築)
②-2 目標とする(重要視する)客観的指標	(ゲノム・プロテオーム解析部門) 研究成果論文の公表 5編 学会発表 2回 外部研究資金獲得のための応募 4件 学内外の共同研究の構築 3件 (分析計測・極低温部門) 研究成果論文の公表: 6(砂月) 学会発表: 28 (砂月 26, 多田 1, 小坂 1) 外部研究資金獲得のための応募: 3(多田1, 小坂1, 砂月継続1) 学内外の共同研究の構築数:11 (多田6, 砂月3, 小坂2) 特許出願:1(多田)
③センター業務領域	自己評価
③-1 目標	(光・放射線情報解析部門) 放射線安全管理、被ばく管理及び作業環境測定の実施と、その全学支援を従来通り実施した。施設の維持管理も従来通り実施した。国際原子力機関による核燃料施設への査察を受入れ、対応した。 鹿田施設ニュースを発行した。
各部門 各部門の日常業務を完全に実施する。(動物実験支援、マウス胚凍結(7件以上)、共通機器の利用促進、受託分析、放射線安全管理、作業環境測定の実施、施設の維持管理、など) ホームページの充実、随時更新を図るとともに広報誌や利用の手引きを発行する。 (ゲノム・プロテオーム解析部門) プロテオーム受託サービスの充実を行う。 (分析計測・極低温部門) 平成23年度全国機器分析センター会議を主催する。 (動物資源部門) 附属病院医療統合開発シミュレーションセンターの活動を支援する。 鹿田施設でのマウスの最大収容能力を増強する。 部屋貸し実験室の共同実験室化(1件以上)を実施する。 共同利用機器の導入(1機以上)を図る。 機器の共同利用促進を目的とした職員の再配置を実施する。 平成22年度動物資源部門鹿田施設・津島北施設年報を発行する。 センターニュースの発行(3回以上)	(動物資源部門) 動物実験(中型動物)の実験支援を実施 マウス胚凍結作業(8件実施) 施設の維持管理に邁進(マーマセット飼育室新設、レベル2感染実験室の整備等)・鹿田施設、スナネズミ飼育室の新設・津島北施設) ホームページ更新 附属病院医療統合開発シミュレーションセンターの活動を支援するために中型動物実験室に共同利用の麻酔装置及び生体モニターを設置した。 飼育装置を1室整備し、マウスの収容能力を高めた。 中型実験室と感染実験区域、旧館1階の部屋貸しとなっている室の部屋貸し解消をし、共同利用室を拡大した。 共同利用機器としてX線照射装置の更新、X線CT装置・生化学自動分析装置

<p>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p>	<p>及び自動血球計数機を導入した。 センターニュースを3回発行した。 一方、施設年報は発行が遅れ、来年度に発行予定</p> <p>(ゲノム・プロテオーム解析部門) 部門の日常業務は完璧に行った。また、プロテオーム受託解析を9件実施した。</p> <p>(分析計測・極低温部門) 《分析計測分野》 共同利用機器の利用推進:利用料金, 光熱水料の徴収などの事務体制を整えた。 技術関与する機器数:13 (元素分析, NMR3,LC-QTOF, シーケンサー, X線回折4, 原子吸光, ペプチド合成機, AXIMA-QIT) 受託分析(元素分析 905試料, LC-QTOF 6件, X線回折装置 5件, シーケンサー 5試料) 施設の維持管理:2件(換気扇修理点検(5月), エアコン新設工事(3月)) ホームページ充実:分析計測分野HPLリニューアルオープン(10月), 産官学連携とリンク 広報誌:H22年度版冊子配布(11月) H23年度版 3月発行(PDF掲載) 平成23年度国立大学法人機器分析センター会議を開催し, 提言を行った。 《極低温分野》 液体窒素供給実績:約6200回, 62t (130研究グループ) 液体ヘリウム供給実績:約550回, 37000L (15研究グループ) センターコロキウム発表:2(砂月, 浦上)</p>
------------------------------	--

<p>④社会貢献(診療を含む)領域</p>	<p>自己評価</p>
-----------------------	-------------

<p>④-1 目標</p> <p>(分析計測・極低温部門) 学外受託分析サービス(元素分析外)を行う。 学外者の機器見学会を受入れる。 (ゲノム・プロテオーム解析部門) 高校生を対象とした、組み換えDNA実験指導を実施する。(1回) (動物資源部門) 社団法人日本実験動物技術者協会関西支部マウス・ラット上級技術講習会を開催する。 国立大学法人動物実験施設協議会高度技術研修会(主催文部科学省・熊本大学)に講師として参加する。 学会、協議会、研究会等の関連領域の学術団体の運営に関与する。</p>	<p>(光・放射線情報解析部門) 福島原発事故対応:文部科学省による福島県の土壌モニタリングの現地調査に参加した(2名)。 放射性廃棄物に関する講演会で講演した(2回)</p> <p>(動物資源部門) 例年通り、7月に社団法人日本実験動物技術者協会関西支部マウス・ラット上級技術講習会を鹿田キャンパスで開催した。 縦木が国立大学法人動物実験施設協議会高度技術研修会(主催文部科学省・熊本大学)に講師として参加した。 矢田が社団法人日本実験動物技術者協会関西支部の幹事として活動し、同支部の春季大会の大会長として活動した。 縦木が国立大学法人動物実験施設協議会の幹事、組織委員会委員、中型動物委員として活動した。 縦木が九州実験動物研究会の評議委員として活動した。</p>
--	---

<p>④-2 目標とする(重要視する)客観的指標</p>	<p>(ゲノム・プロテオーム解析部門) 高校生を対象とした、組み換えDNA実験指導を実施した。また、全国組換えDNA実験協議会と共催で全国レベルの遺伝子組換え実験の安全講習会を開催した。</p> <p>(分析計測・極低温部門) 《分析計測分野》 学外受託分析:元素分析 19 試料(3カ所), NMR 4 試料(2カ所), 薄膜X線:1 試料、1カ所, 微小結晶:1試料、1カ所 (X線回折装置2件は学内共同研究者が支払い) 機器見学会: 1(放送大学) 知恵の見本市出展 《極低温分野》 一般公開:1回(科学大好き岡山クラブ 8/28)</p>
------------------------------	---

【総括記述欄】

各部門共に研究分野では基準を大幅に上回っており、科学研究費の申請率も80%を越え、採択された課題も3件に達している。教育面では、各部門が業務の一環として行なう教育訓練、講習会が充実しているほか、学部教育にも積極的に参画している(動物資源部門等)。センター業務に関しては、各部門とも格段の努力を傾注した。特に、上記では言及していないが光・放射線部門は鹿田地区における産学官連携センター(OMIC事業)に、動物資源部門と共に大きな貢献を果たしつつある。両部門は津島地区におけるアイトープや動物実験に関する管理体制の構築にも大きな努力を払った。分析計測・極低温部門とゲノム・プロテオーム部門は学外にも開かれた共同利用、受託解析サービスを継続または新規事業として行ないつつあり、英語による講義や高校生への公開授業等共に、社会貢献を果たした。更に、ゲノム・プロテオーム部門は新年度から組み換えDNA実験に関する学内標準ガイドラインを作製し、法制上適確な実施体制を構築するために努力している。全ての部門は学内外の共同研究の構築に努力しており、また全国レベルの連携活動も積極的に参加している。中には指導的役割を果たしている部門も多い。このように、本支援センターの教職員は報われることの少ないサービス業務に邁進しつつ、濃淡の差は多少あっても、教育や研究にも涙ぐましい努力を重ねており、大学のコンプライアンスを直接担う本支援センターの教職員に対して、大学当局は現在以上の支援をお願いしたい。次年度はこれらの事業、特に施設ハード面での充実と共同研究の発掘をより積極的に推進する必要がある。